

平成 28 年の平和宣言について

1 宣言作成の基本姿勢

- (1) 「平和宣言に関する懇談会」での意見を踏まえ、市長が起草した。
- (2) 平和宣言の要素として、「被爆の実相」、「核兵器を巡る世界の状況」、「平和への誓い」、「核兵器廃絶に向けた訴え」、「被爆者援護施策充実の訴え」、「原爆犠牲者への哀悼の意」等を盛り込んだ。
- (3) 昨年の平和宣言から、核兵器廃絶に取り組む際の原動力となる信念を固めるために必要な行動理念を提示し、世界の人々、特に為政者に相互不信や疑心暗鬼から抜け出すために理念の転換を促している。行動理念としては、去年は「人類愛」と「寛容」を提示し、今年は「情熱」と「連帯」を提示する。また、平成 23 年から平成 26 年に寄せられた被爆体験談から、行動理念に関連する体験や思いを被爆者のメッセージとして盛り込んだ。
- (4) 原爆投下国の現職大統領として初めて広島を訪問したオバマ大統領の演説から、「私自身の国と同様、核を保有する国々は、恐怖の論理から逃れ、核兵器のない世界を追求する勇気を持たなければならない。」という訴えを引用し、これは被爆者の「こんな思いを他の誰にもさせてはならない」という叫びを受け止め、核兵器の廃絶に立ち向かう「情熱」を、米国をはじめ世界の人々に示すものであると指摘した。
- (5) また、G7 外相が、核保有国、非核保有国という立場の違いを超え、世界の為政者に広島・長崎訪問を呼び掛け、包括的核実験禁止条約の早期発効や核不拡散条約に基づく核軍縮交渉義務を果たすことを求める広島宣言を発表したことは、「連帯」に向けた一歩であると指摘した。
- (6) そして、被爆者の高齢化が進む中、核兵器のない世界を実現するためには、特に若い世代の力が必要であるとして、平和首長会議が若者の交流を促進していくことを盛り込んだ。
- (7) さらに、平和宣言を広く市民に理解してもらうため、出来るだけ分かりやすい表現に努めるとともに、原爆投下年月日、犠牲者数、日本人以外の犠牲者がいたことなどを示し、若い世代への継承も意識した。

2 宣言に盛り込んだ主な内容

(1) 被爆の実相

ア かつて人類が経験したことのない「絶対悪」が広島を瞬時に焼き尽くし、子どもからお年寄りまで罪もない人々を殺りくした事、その中には朝鮮半島や中国、東南アジアの人々、米軍の捕虜なども含まれていた事、そして、その年の暮れまでに 14 万もの人が亡くなった事を提示する。

イ 辛うじて生き延びた人々も放射線の障害に苦しみ、就職や結婚の差別に遭い、心身に今なお消えない深い傷を負っている事を訴える。破壊し尽くされた街は生まれ変わったが、川辺の景色や暮らし、歴史と共に育まれた伝統文化は、二度と戻ることはない事を盛り込んだ。

(2) 核兵器を巡る世界の状況

依然として世界には、71 年前の原子爆弾の威力をはるかに上回り、地球そのものを破壊しかねない 1 万 5 千発を超える核兵器が存在していると指摘。また、テロリストによる使用も懸念されていると訴える。

(3) 行動理念等

ア 行動理念

私たちは、非人道性の極みである「絶対悪」をこの世から消し去る道筋をつけるためにヒロシマの思いを基に、「情熱」を持って「連帯」し、行動を起こすべきではないかと呼び掛ける。また、為政者は、「連帯」をより強固なものとし、信頼と対話による安全保障の仕組みづくりに、「情熱」を持って臨まなければならないと指摘する。

イ 行動理念に関連する被爆者の体験や思い

私たちは、壮絶な体験をした被爆者の、人類は命を大切に「連帯」することが重要との訴えや、次の世代は核兵器を廃絶するための「情熱」を持ってもらいたいとの呼び掛けを受け止め、更なる行動を起こさなければならないと指摘する。そして、私たちは多様な価値観を認め合いながら、「共に生きる」世界を目指し努力を重ねなければならないと訴える。

(ア) 当時17歳の男性

引用箇所：「真っ黒の焼死体が道路を塞ぎ、異臭が鼻を衝き、見渡す限り火の海の広島は生き地獄でした。これからの世界人類は、命を尊び平和で幸福な人生を送るため、皆で助け合っていきましょう。」

(イ) 当時18歳の女性

引用箇所：「私は血だらけになり、周りには背中中の皮膚が足まで垂れ下がった人や、水を求めて泣き叫ぶ人がいました。与えられた命を全うするため、次の世代の人々は、皆で核兵器はいらないと叫んでください。」

(4) 平和への誓い

被爆者の平均年齢は80歳を超え、自らの体験を生々の声で語る時間は少なくなっている。未来に向けて被爆者の思いや言葉を伝え、広めていくため、平和首長会議は、世界の各地域ではリーダー都市が、また世界規模では広島・長崎が中心となって若者の交流を促進し、若い世代が核兵器廃絶に立ち向かうための思いを共有し、具体的な行動を開始できるようにしていくことを誓う。

(5) 核兵器廃絶に向けた訴え

ア 各国の為政者に、改めて被爆地を訪問するよう要請し、その訪問は、オバマ大統領が広島で示したように、被爆の実相を心に刻み、被爆者の痛みや悲しみを共有した上での決意表明につながることを訴える。

イ 広島で「核兵器のない世界を必ず実現する」との決意を表明した安倍首相に、オバマ大統領と共にリーダーシップを発揮することを期待するとともに、日本国憲法が掲げる崇高な平和主義を体現する世界でもある「核兵器のない世界」の実現を確実なものとするためには、核兵器禁止の法的枠組みが不可欠であると指摘する。

(6) 被爆者援護施策充実の訴え

被爆者をはじめ、放射線の影響により心身に苦しみを抱える多くの人々の苦悩に寄り添い、その支援策を充実するとともに、「黒い雨降雨地域」を拡大するよう強く求める。

(7) 原爆犠牲者への哀悼の意等

原爆犠牲者の御霊に哀悼の誠を捧げるとともに、被爆地長崎と手を携え、世界の人々と共に核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けて力を尽くすことを誓う。

3 宣言文

別紙のとおり。(8月6日平和宣言開始後解禁)

(参考資料1) 平和宣言に関する懇談会の開催結果

(参考資料2) 平和宣言で引用した被爆体験談を書かれた方のコメント等